

---

# 涼宮ハルヒの何か

鷹山 聖慈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

涼宮ハルヒの何か

### 【Nコード】

N4602I

### 【作者名】

鷹山 聖慈

### 【あらすじ】

キョンに変わって女になってしまった古泉。

しかし、これだけで話は済まされなかったのである・・・

## プロローグ（前書き）

この小説は、YouTubeに掲載されていた動画（<http://www.youtube.com/watch?v=qgv19ordvtg>）を元に、その続きを書いてみたものです。

性転換の描写を含みますので、これを苦手とされる方はお読みにならないようお願いします。

## プロローグ

いつも通りの学校生活。これ程素晴らしいと思ったことが今まであっただろうか？

昨日はハルヒの（身勝手な？）願望で女になっており、しかもすべて都合が良いようにSOS団以外の人間は、俺が昔から女であるという設定なのだ。

7つの玉を集めては召還することで、願いをかなえられる竜でも、ここまで都合よく出来るであろうか？

いつその世界そのものが閉鎖空間じゃないのかとアホなことまで考えてしまうのだが・・・それにしても気持ちよく、俺は俺として学校生活を送れるのが幸せだと、骨身に感じている。

・・・一方で「口は災いの元」と言うのも実感した。

あれで周りは「昨日まで男だったろ？」等と言われたらどうなっていたことやら・・・確実に自殺は免れん。いや、しないという自信を持てるやつがいたら是非連絡して欲しいくらいだ。その自信があれば、ハルヒと円満で退屈の無い素晴らしい学生生活を送ることが出来るはずだ。

鶴屋さんの一声で、俺は元の姿に戻ることが出来た。

本当に鶴屋さんのあの一言には感謝だ。

嫁の解釈をまともに捉えてくれなければ、一生俺は戻れなかっただろう。

そう考えると恐ろしくて寒気がしそうだ。

あ、でも今日はちょっと冷えるな・・・考えてみれば、カーディガンを着ている女子が多いような気がする。

季節は秋。

体育祭に文化祭と言った、一連のイベントがすべて消化され、後は

学期末のテストを残すくらいである。

小学生の時は長いと思っていた一年という月日も、高校生ともなるとあっという間だ。

こうしていられるのも来年まで。再来年はやれ進学、やれ就職で追いつめられる日々を送るのだからうけど、その頃のSOS団ってどうなってるんだろうか？

部室で勉強？

朝比奈さんの淹れるお茶を眠気覚ましに言うのはありそうだが、結局ハルヒが騒いで勉強にならないだろう・・・

というか長門も朝比奈さんも、この世界の間じゃなければ進学や就職の必要なんてないだろう。古泉だって就職や進学なんぞしなくたって十分食っていける。

ハルヒはどうするのかわからないが・・・

「会社を設立するわよ！」

なんて言われようものなら・・・俺は世界一忙しい、そして悲しいサラリーマンになってしまう。

はぁ・・・

どこまで俺は想像やら妄想やらしてるんだか・・・

いろんな意味での溜息をつくとき、後ろから不満そうないつもの声が降りかかる。

「なーに溜息なんかついちゃってるのよ。」

涼宮ハルヒ。俺は4月から、こいつによって本来送るべきはずの学生生活をとんでもない方向へと追いやられている。

昨日がよい例だ。これまでも勘弁して欲しいことはいくらでもあったが……

「別にー」

頬杖をついて、どんよりと曇る空を見る。

「まーったくこれから楽しいことが待っていると言っているのに、そんな辛気臭い顔しちゃってさー」

「楽しいことって……お前だけが楽しいんじゃないのか？」

「あたしが楽しいならみんなも楽しいのよ！特にSOS団のみんなはね！」

「おいおい……どうしてそうなるよ……」

まああんまり不満を抱かせると、また後が大変になる。折角のお誘いなのだから楽しいと言う話題に付き合ってみるとする。

「……で、その待っている楽しいことって言うのは何なんだ？」

「あら？興味津々？」

「もったいぶるな」

「んっふっふっふっふっふっふ」

腕組みして横目で不適に笑うハルヒ。悪い、その不敵な笑みはやめてくれ。昨日のことを思うとこっちの身に危険を感じる。

「まあ放課後のお楽しみかな？」

「もったいぶるなよ」

「だって、今言っちゃったらキョン部室寄らないで帰っちゃうかもしれないじゃないー」

「普通に気になるだろー！」

「だーかーらー授業終わってのオ・タ・ノ・シ・ミ・ だってばー」  
朝比奈さんならベストマッチなその表現……まあハルヒも似合わないことはないが……でもやめる。やはりお前だと身の危険を感じざるを得ない……

「ハイハイハイ！前向いた前向いた！授業始まるんだから！」

……とハルヒが俺の背を前に押すと、タイミングよく始業のチャイムが鳴る。

次は世界史か・・・

机からノートと教科書を取り出し、ノートに一応今日の日付を書く。するといつものように地理担当の教師が入ってきて、授業が始まる。今日はヨーロッパは大航海時代等についてだと。

これは完全に睡眠のための呪文だ・・・似たようなカタカナの名前に、俺は眠ってしまった。

頼むから寝ながらにして知識を習得する授業システムを確立してほしいものだ。

## プロローグ（後書き）

「転換」「反転」「気まぐれ」・・・色々と「涼宮ハルヒの〜」に  
続く単語を考えたのですが、どうもしっくり来ないので。

しかも多少強引にまとめてしまっている箇所が見受けられるような

・・orz

既に大人気の作品に後から、しかも本編には無いパロディから入っ  
てきて、興味本位で書いてみたもの・・・

そんな輩が「涼宮ハルヒの〜」に続く単語を正確に設定すること事  
態おかしいですね。

そういうわけで、読まれた方々が思う言葉を当てはめれば良いので  
は？と言う感じで、「何か」とした次第です。

後はとにかく無い頭を働かせて、色んな要素を問題の無い範囲で取  
り入れて書いてみたいと思います。

（部分部分はいろいろ思いつくんだけどなorz）



- 1 - (前書き)

この小説は、YouTubeに掲載されていた動画(<http://www.youtube.com/watch?v=qgv19ordvtg>)を元に、その続きを書いてみたものです。

性転換の描写を含みますので、これを苦手とされる方はお読みにならないようお願いします。

やっとこさ午前の授業が終わり、昼休みだ。

学生生活で一番の楽しみじゃないだろうか？出来ればもう一時間増やして欲しいなどと思いつつ、カバンから弁当を取り出す。

普段の昼食は親が作る弁当なのだが、今日は親が用事で出かけることになっていたため、登校中にコンビニに寄って買ってきた。学食でも良かったのだが、混雑しててゆっくりは出来ない。折角の休みを戦場の如く混雑した学食で無駄にしたくない。

そして、いつもなら谷口と国木田、阪中らと昼食を取るのであるが、今日は部室で昼食と取るようになっていて。何故なら今朝、下駄箱から上履きに履き替える際、一枚の紙切れが入っていたからだ。

「昼休み、部室で待つ 長門有希」

長門から部室に来るようというメッセージ。話題はたぶんもなくでもない。100%アイツのことだ。

教室は早速憩いの場へと変わってしまった。机を適当に寄せて弁当を広げれば、弁当を忘れたのだろうか？それともダイエット中か？ゲームやらマンガやら取り出すのもいる。

おちおちしてられない。長いようで短い昼休み。谷口と国木田に今日は部室へ行つてくると一言言つて、弁当片手に部室へと足を運ぶ。メニューはパンとサンドイッチ、それにパックのコーヒー牛乳だ。こんなもので足りるのかと思うが、お釣りを自分のものにするための儉約術だ。授業があと2つだったら仕方が無い。もっとポリウームのあるものをチョイスしていたらだろうか、あと一個くらいは体育でもなければ十分だ。

ポケットに手をつ込みながら小走りで部室にたどり着く。静かに

ドアを開けると、既に先客3名。

「あ、キヨン君こんにちは・・・」

「・・・」

「こんにちは」

既にハルヒ以外の面々が集まっていた。

一人目は朝比奈さん。

ハルヒがいないのもあるが、さすがに昼休みでは着替えを含めるとメイド服でいる時間はごく僅かだ。ハルヒもいないから制服姿で構わないのだが、同じ学校の人間なのに制服姿が珍しく思えてしまうのは・・・ハルヒのせいだ。

揃ったところでお茶を淹れる準備を始めてくれる。お昼にも朝比奈さんのお茶を頂けるとはありがたい。

二人目は長門。

元々昼休みもここに来て本を読んでいるのだ。相変わらず分厚い本のページを進めている。

授業中もひよっとしたら教科書じゃなくて分厚い本を読んでいそう  
だ。

唯一、いつもの異なる点は、余程好きなのだろう。カレーパンを食べながら読んでいるところだ。

そして三人目・・・

「私の方が前まで少しだけ背高かつたんですけどね」と笑みをこぼしながら話す女子。

サラサラのロングヘア。朝比奈さんに勝るとも劣らないスタイル。そしてお嬢様を連想させるような、とにかく落ち着いた雰囲気。

もうこの物語がどんな物語なのかわかっていいるのだから、先に進めよう。

三人目は古泉だ。

古泉一樹。今は古泉一姫となっており、名前の読みは”いつみ”だ

そうだ。

こいつ・・・本来男であるとわかってなければ、朝比奈さんと同じように接することが出来ただろうけど・・・

まあ細かいことはもう端折ろう。時間も無いし、そんな話はもう退屈だ。

簡単に言っておけば、俺がハルヒの願望で女になってしまった昨日、俺が女では結婚できないよと鶴屋さんに指摘され、ハルヒが絶望したその後、ふと言ってみたのだ。

古泉が女だったら？と。

そしてその結果がこれなのだ。こちらとしては

計画通り

なのだ。

俺はかなり満足している。古泉には悪いが、実は古泉があまり好きではない。

とにかくさわやかな0円スマイル、そして嫌味な口調。女ばかりの環境にもう一人男子がいるのはありがたいが、谷口や国木田と違って正直苦手なのだ。

そして俺を怒らせたのがあの一言だ。我ながら根に持つタイプに見えなくも無いが・・・

「いつそのまま女性として過ごして・・・」

古泉よ、他人事だと思って言ったそれがきっかけなのだ。

決して不義理だと思って怒ったのではない。だが、俺がそこで突っ込めば冗談ですよと返すのなんぞもう見え見えだ。扱いではこいつが一番パターン化している。伊達にしょっちゅうゲームの相手をしているわけではない。

話を戻そう。あの昨日の出来事は、女になりたいと言う願望を持つ

ている者であれば素晴らしい出来事であろう。原因がハルヒとわかるや否や、神やら教祖やらと崇めるだろう。

だが、俺は俺だ。女でいたいと思わない以上、そして男で生まれた以上、それでいたい。

だからあれは俺の中では緊急事態だったし、一日どころか一分一秒でも早く男に戻りたかった。

女として楽しむなんて余裕は一切無かったし、楽しみたいとも思わなかった。

何よりも動けないのだ。いつものペースで体が動かせないのがとにかく辛かった。

いつもならグダグダ言いながらも上りきることの出来た坂道も、教室へと上がっていく階段も何もが、何だかんだ言いつつも楽に上がる事が出来たのに、昨日は地獄だった。

すぐ息切れするし、買ったジュースの栓も開けるのとにかく格闘だった。あれやこれやの作業にどれだけ全身の力を振り絞ったことやら……

タダでさえ精神的に来ていたところに体力まで必要以上に求められると言っただから、そりゃちょっとやそつとの一言で怒りを覚えるくらいナーバスになるさ。

そう、疲れているところへ決定打だったのだ。

大人気ないと思うかもしれないが、疲れてストレス溜まっているところへ、一生女で過ごせばなどと言われれば、女でいたいと思っていればなかったであろうが、俺はそんな考えを微塵も持ち合わせていなかった。

女は怒ると怖いと言っのを、俺は自分で体験してしまったようだ。くわばらくわばら。

まあ戻す方法は既に分かりきっていることだ。

ハルヒが飽きるのを待ってもらってとことろだろう。

せいぜいかわいがられるがいいさ。俺が女るときよりもこいつは楽しめるんじゃないのか？ だいたいスタイルがスタイルだ。ここだけ

の話だが、実はちょっと羨ましかったりしたのだ……

「キヨンさんのときはあっさり解決しましたが……私の場合は先の話になってしまいそうです」

女性でも相変わらずさわやかなスマイルで話す。女性である分、大抵の男はそこでデレツとしてしまいそうだが、目の前にいる美人女子高生は、本来は男なのだ。

他の男子を騙せても、俺はそう簡単には騙されないぞ。古泉よ。

「まあ朝比奈さんに匹敵する可愛さだから……当分の間はお前が朝比奈さんの代打で決定だな」

なんの代打なのかは説明不要だろう。

「他人事のように言われるとちょっと困りますが……」

笑みを浮かべつつも、流石にそれだけとは言わんばかりに口元がゆがむ古泉。

お前も十分他人事のように言っただろう。お返しだ。

「まあいつまで……とは言えないけど、朝比奈さんが落ち着けるって思えば良いんじゃないのか？ハルヒも当分遊べそうだしな。」

「閉鎖空間が生まれるのとどっちがマシか悩みますよ」

「でも答えはもうわかってるじゃないか」

立っているのもなんなので、古泉の隣……いつもの席にパイプ椅子を広げて、袋からパンとコーヒーを取り出す。まずはチキンカツサンドから頂こう。コーヒー牛乳のパックにストローを挿し、俺は古泉の困り顔など気にすることなく、優雅に昼食を取る。

「確かに答えはわかっています。……ふう……でも、ひどいですよお」

「萌え攻撃は通用しないぞ。少なくともお前から俺にはな」

「でも、他人事だと思っていたら大間違いですよ？別の意味で」

「女になってしまったことで超能力まで失ったってのか？」

「いえ……そういうわけではないのですが……」

「なら問題ないじゃないか。あとは出来るだけ閉鎖空間がないよう

にしていけば良いんだろ？だったら今までうちらがやってきたこと  
だろうしな」

「・・・ところがそうでもないんですよ」

「何かあったのか？」

流石に聞かないわけにはいかなかった。予備知識もなしに巻き込ま  
れるのだけはゴメンだったからだ。

いや、その予備知識も「言語では伝えきれない」とか「禁則事項で  
す」とかいった感じであれやこれやなフィルターに掛かっているも  
のだから、まともに予備知識をつけたところで何も変わらないのだ  
が・・・

でも聞かないよりはマシだと思ったのだ。

尤も、しばらく話を進めてるうちに

「前言撤回。ダメだこりゃ」

となるのがオチな気もしてしまっているのだが。

それにしても寒いな・・・

今日は朝から曇天である。

日が入らないとこんなに寒いとは・・・冬が思いやられる。

そんな中、古泉の話が始まった。

「・・・」

3点リーダーは俺のだ。

何というか・・・俺も長門みたいにずっと黙ってしまったみたいで、  
気付けば無意識のままに朝比奈さんが淹れてくれたお茶、コーヒー  
牛乳、サンドイッチを順番に口に入れていた。

古泉の説明によると、古泉が元の男の姿に戻るには、一定の条件を  
満たさないといけないというのだ。

飯にハルヒが「小泉さんが男だったら」的な考えを持って次の日  
を迎えても、古泉が男になっている可能性が低いと言うのだ。

もし、仮に男の姿に戻ったとしても、本来の状態に戻れない危険性があるのだと言う。

理由は決して超能力者だからとか、機関に属しているからと言ったような都合の良いものではなく・・・

「森さんがメイドではなく、執事になっていたのです」

何と、古泉だけでなく、メイド・・・というのは表向きで、機関の人間である森さんも変わってしまったというのだ。

長門が言うには、あくまで推測だが、涼宮ハルヒの願望は特定の有機生命体のみならず、その有機生命体に形態を問わず関連する部分にまで影響を及ぼすようになってしまっていると言うのだ。

「朝目覚めて・・・私が女性になっているのだけでしたら、原因はともかく理由はほぼ推測できることですから、自分を保つことは出来ました。でも森さんが私より頭一つ大きい好青年な執事になっていたのには、かなり驚きました。それはもう私と森さんが入れ替わっちゃったのかと思わせるくらいです」

古泉曰く、変わってしまったのは古泉と森さんだけだと言う。

俺だったら妹と一緒に性別が変わってしまったと言ったところか。俺が姉で妹は弟か・・・でも俺のときは俺だけだったな・・・妹は妹のままだった。俺を元から姉だということにもなっていたし・・・

「他の人間はそれが普通だと思っているのか？」

「ええ、今のところそのようです。機関の人たちも私は女性として閉鎖空間で神人と戦うメンバーで、会話も以前からそうだったかのように話すんです。」

「森さんは以前から男だったことになっているわけか」

「はい。役割も変わっていませんでした。メイドと執事の違いを除いては」

「ふむ・・・」

改めてチキンカツサンドを頬張り、コーヒー牛乳で押し流す。

「ってか待て・・・俺はハルヒに「俺が男でなければダメというな



ら、古泉が女だったらどうだ？」って聞いてみただけだぞ。少なくとも俺とハルヒの間の会話に、森さんどころか他の人間が入るような余地はなかった。なのにそれが原因なのか？」

「恐らく・・・涼宮さんが私が女性だったらと考えたときに、周囲の人たちのことも考えたのでしよう。あなたが女性化したときは、涼宮さんもあなたしかイメージしなかったものでしょうけど、私の場合はほら、夏休みのこともあったので・・・森さんも浮かんだのでしよう。ひよっとしたら多丸さんや新川さんらも浮かんだのでしようけど、彼らは私たちよりずっと年上ですしね。年齢が近い森さんだけが対象に含まれてしまったのだと思います。」

なるほどな・・・周囲にも気に入った人がいれば巻き込んでしまうというわけか。

こればかりはちよつと誤算だったかもな。って待て。俺が悪いのか？まあ確かに最初に話を振ったのは俺だ。俺がそんな夢を見てしまったのだからな。

下手すれば妹が弟になってしまっていたのかもしれないとも考えられる。

妹もハルヒとは接点があるしな。

「そうやって他の関係ない人たちまで自分の描くイメージに含まれてしまうと、あとで元に戻るのが大変になります。」

「・・・」

ヤバイ・・・二の句が告げん・・・

口は災いの元。その災いの元は俺なのか。

いや待て待て待て待て待て待て待て待て待て・・・

一般人の俺からしてみたらただ話したただけだぞ。教室を移動する必要の無い休み時間に、単に話題を振っただけだ。他愛ない会話の一つだぞ。

にも関わらずそんな影響が出てしまうと云うのなら、今後俺はハルヒに対して何を話せば良いのだ？

そんなこといちいち気にしていたらこっちの身が持たない。

それでいてストレスを溜めないようにしろなどと言われようなら・・・  
・完全に大損しまくりのボランティアじゃないか。  
やってられるかと言わんばかりにサンドイッチを噛み付く。

元に戻す場合は、ハルヒにイメージさせる。

対象が一人であれば、周囲は元々そうだったというイメージだけで通用する。

対象が一人なら、その一人だけなので楽だ。ちょっとした話題を振るだけで解決は可能だろう。

だが、対象が二人、三人と増えていくとなると、ハルヒに全員をイメージさせなければならぬ。

対象がよく知っている人間であれば問題は無いはずだ。しかし、知っている人間の関係者になってしまうと、名前だけ知っていると言ふような、実際は良く知らない人になってしまう。

友達の友達を簡単に思い浮かべられるだろうか？名前は知っているか？どんな人かなんて、自分も友達同士にならなければ他人同様だ。名前が男でも女でも通用するような場合だと更にややこしくなる。

ハルヒのことだ。「古泉君が女なら〜森さんはメイドじゃなくて執事ね」と言った具合に俺が話したことに、意識してか無意識でかは問わず拡大拡張してしまったのだろう。

確かに森さんは、表向きとは言いつつも、朝比奈さんも参考にしてしまっくらいしっかりしたメイドさんだったもんな。ハルヒにだってインパクトを与えたのは間違いない。

古泉一人だけで十分なのに、とんでもないおまけをつけてしまったものだ。

まあ森さんなら話したことはあるし、会話の中で「森さんが女性だったらどうだと思う？」と言った具合でなんとかなりそうだ。これは不幸中の幸いだらう。

だが、今後全く知らない人が対象に含まれるリスクは十分に高い。

俺だけでなく、古泉や朝比奈さんらとの会話がきっかけで起こりうることも、否定できないのだ。

そして、一番の問題は大して知らない奴。もしくはハルヒがどうでも良いと思っている奴が対象となってしまうたら目も当てられない。「はあ？何言ってるの？あんなのが男（または女）なんてありえない！」とでも言われれば、もう終わりだ。望む望まない、知る知らない関係なく、転換させられた人たちは、もうその性で一生を過ごしていかなければならなくなる。

知らぬが仏とは言いが、だからと言ってハルヒの良いようになってしまつては大変だ。

特にSOS団の人間に限っては、変わった事がわかつてしまつていくからだ。

そして、このような会話をハルヒに聞かれ、全く縁も関係も無い人たちによつてきっかけを作ってしまったら・・・これはこれで大惨事だ。

「・・・現在の涼宮ハルヒの状態は極めて良好。但し、一つを除いて・・・」

ずっと本の世界に入っていた長門が顔を上げ、こちらを見つめながら話す。

「一つを除いて・・・？」

「・・・願望を働かせる感情、その働きが起きる際、現状におけるデータ改ざんを起こさせるためのトリガーが働いている。恐らく強制的に割り込みプログラムを実行させるためのトリガー・・・」

買ってきたパンは、全ていつの間にか食べつくし、左手には一口か二口分のコーヒーしか残っていなかった。

食べながら夢中で色々考えてしまったようで、せつかく美味しそうだと思つて買ってきたチキンカツサンドは、残念なことになどんな味だったのか、どんな食感だったのか全然覚えていないのだ。

僅かにソースの味がするような気がしたが、次の瞬間、最後僅かに残ったコーヒード、完全に上書きされてしまった。

そんな中、長門の解説が入ったのだが・・・

「それは涼宮さんが・・・私が女性だったらとイメージされる際に、別の何かが働いているということですか？」

長門はコクンとうなづく。

「・・・涼宮ハルヒの願望も含まれるが、彼女の願望のうち叶うように設定されるは、あくまで本人に直接的な関連性が見られるもののみ・・・でも・・・今回は直接的な関連性の無い部分までに改ざんが入っている。これは涼宮ハルヒが進化したわけでもなければ、彼女の願望による働きが増幅されたものでもない。確実に何者かが外部から、そのきっかけを利用している。」

「改ざんって・・・何者かが余計なことまで起こしているということか？」

「・・・誰かはわからない。有機情報思念体でも分析はまだ出来ない。恐らくいくつかのエラーデータやバグが蓄積して形成されたもの、それらを足がかりに利用することで行われているかもしれない。ソースコードの見直し作業が進められているけど、現時点で確認されているエラーはすべて許容範囲のものばかり。でも、何者かが意図を持って改ざんを行っている可能性は十分に高い」

「誰がやっているのかはまだわからないだな」

「・・・まだ不明。本来なら古泉一樹だけが女性となるはずだった。恐らくその際に周囲の人間を予め割り出しておき、無理の無い範囲で意図的に涼宮ハルヒの展開されたイメージ内に関係者のイメージを割り込ませて、思考の範囲を意識させること無く増やしている。だから森園生も男性として形成されたと考えられる。現に今も割り込みのトリガーが働いているのが確認できた。」

「！」

「今度は違う人が変わるわけですね」

「ええ〜つと〜・・・誰かが男から女・・・もしくは女から男になつちやうつてことですよね〜？」

「また俺か？」

「いえ、あなたはもうなることはないでしょう。いくら何者かが女性化させようとしても、鶴屋さんからの一言で大きく変わりましたからね。私が戻るならこれ幸いですが・・・同時に森さんも含まれないと解決にはなりません。尤も、改ざんするトリガーを除かなければ最終的な解決にはならないでしょうけど」

「誰をイメージしたことによってトリガーが機能したのかはわかりませんか？」

「・・・涼宮ハルヒがここにいない時点では判定は出来ない。現時点では作動したことまでしかわかっていない。」

「あの〜〜〜」

朝比奈が恐る恐る長門に聞く。

「古泉君は女性になっても超能力が維持されていると言っていましたけど〜私や長門さんがそうなくなってしまった場合も、その・・・特性と言うか特徴と言うかは・・・」

「・・・影響はないと考えられる。でも保障は出来ない。データに特性や特徴を消失させるような記述が含まれてしまえば、改ざん時にそれらも消去される。当然、私やあなたにも影響が及ぶ可能性は否定できないし、それすらを忘れてしまうことも十分に考えられる。」

「いつどこで力やらを失ってしまうかもしれない危険な状況らしい。」

目が覚めたら一般人になっていた・・・翼の折れた何とやら・・・それでいて閉鎖空間やら何やらな事態になったらもう打つ手がない。朝比奈さんはブルブル振るえ、流石の古泉も冷や汗をかいていた。

俺はと言うと・・・その両方だったかもしれない。

普通以上の寒気を感じていたのは確かだった。

・ 2 ・ (前書き)

この小説は、YouTubeに掲載されていた動画(<http://www.youtube.com/watch?v=qgv19ordvtg>)を元に、その続きを書いてみたものです。

性転換の描写を含みますので、これを苦手とされる方はお読みにならないようお願いします。

2話までは勢いながらもセコセコ書いてました。色んな本からシーンを参考にしつつ、盛り上げられればと思っっているのですが、偏屈なワタシにそんなことが出来ることやら・・・orz

昼休みも残り僅かな時間になったので、俺たちは一旦解散することにした。

腹も満たしたし、お昼にも朝比奈さんのお茶を飲むことも出来たのは幸せだ。

後は午後の授業が一つ残るだけ。英語だったか？それとも数学だったか？とにかく心地よく眠れそうなことだけはハッキリしている。

長門は図書館から借りた本を返さなければいけないということで、先に部室を出た。

「私たちも戻りましょう」

すっかり・・・ではなく、もはや初っ端から女性らしく振舞う古泉。どこかで訓練でもしたのかと聞いてみたりもしたが、そうではない。元々が出来ているのだ。

だがよく一人称を僕から私に早々と切り替えられると思うと関心してしまう。

俺の場合はずっと俺で通ってたっけ。教室では一人称を使わないようにしてたし。

「少しばかりは楽しんでみようかと思ってるんです。こんな経験、普通じゃ出来ませんし」

心に余裕が無くて悪かったな。でも、そんな楽しむ余裕ばかりはちよつと羨ましいとも思えた。

俺の場合とはかく戻るのに必死だったもんな。楽しもうなんて考えは少しも無かった。まあ男でありたいと言う考えが先に来たからなのだろうが。

俺と古泉、それに朝比奈さんの3人で部室の鍵を職員室に返しに行き、2年の教室へ続く廊下で朝比奈さんと別れる。俺と古泉で教室まで戻るのだが、男であろうと女であろうと古泉はやはり古泉のよ

うだ。

大体の会話で先に話しかけるのは古泉だ。これは男であろうと女であろうと変わらないようだ。どうやら人格そのものは俺の時と同じで変化はない。ということは、森さんも男であっても変わっていないのだから。

「今日、もし涼宮さんが先に帰られたらの話ですが・・・」

「また4人で会議か？」

「ええ、出来ればお願いしたいのです。」

「お前が終わった後も残れる気力があれば良いけどな」

「え？」

いつも0円スマイルの古泉がきよとんとした。こいつをこんな表情にさせたことって今まであっただろうか？ひよっとしたらあったのかもしれないが、少なくとも記憶は定かではない。いや、たぶん初めてかもしれない。俺にしてはちよっとした偉業だ。こいつから0円スマイルを奪い取るというのは、余程の事でなければ難しいと思っていたからだ。

尤も、長門に喜怒哀楽の表情をつけさせた方がずっと偉業なのだろうが、長門はあれでいてこそ長門なのだろう。

「どういう意味ですか？」

放課後になればわかるさ。そういう顔に見えたかどうかはわからないが、俺は古泉の顔をちよっと観察しつつ、こいつの質問を無視してサクサクと歩く。

断然かわいはずの女子生徒と一緒に歩いているのだが、俺はストイックなダンディよろしく・・・いや、長門よろしくか。無関心そうに進む。そりゃそうだ。こいつはホントは男で超能力者なんだぞ。だが、それを知らない人たちは俺に対して無情で非情だ。男女問わず俺へ羨望の眼差しを送るのだ。

朝倉の攻撃から身を挺して守ってくれた長門の如く妬みの刃物を俺に放つ・・・

「何だか私たちの注目が凄いですね・・・」



お前が原・・・いや、根本的には俺か。

言ってるやろうと思うものの、結局は自分に跳ね返ってくるのがすぐにわかったし、嘘泣きでもされてしまうと大変だ。こいつは絶対そっくりな真似が得意になっているに違いない。

忌々しいと思いつながらさっさと教室へ戻る。

「じゃあまた放課後にー」

そういつて手を振って小走りで教室に向かう古泉を少しだけ見送り、俺も席に着くのだが・・・

「キヨン！お前古泉とはどういう仲なんだよ？」

藪から棒にと言わんばかりに谷口が詰め寄る。ええい、顔が近い！

お前は男時代の古泉か！

「古泉さん美人だよなー。しかも理系クラスで頭めっちゃ良いし。あれは将来養ってくれそうだよなー」

何言ってるやがる・・・って言っても無理はないか。少なくともハルヒ以外のSOS団の人間以外、古泉が男であることは知らないのだから。「機関」の人間ですら、古泉に言われるまで知りもしない出来事だというし。

にしても、周辺にもしつかり記憶やら記録やらを改ざんしておきながら、どうして俺にはそれが及ばないのだ？

長門と朝比奈さんはそれぞれちょっと特別な存在だから、改ざんの手が回らないのは納得できる。だが俺は何故だ？しかも今回の改ざんはハルヒによるものは単なるきっかけのようなもの。問題になっている部分にハルヒは一切関知も関与もしていない。何故だろう？谷口や国木田の、俺が古泉と一緒に歩いていたのを妬む会話をよそに、俺はひとしきり考え続けた。二人も何やら古泉についてあれこれ話しているらしい。もうとっくにそっちはそっちで世界が出来ているようだから、無視しても問題はないだろう。

そのとき、一つだけ何か違和感を感じつつ、後ろを振り返ろうとしたのだが、すぐに戻った。

いつの間にか、国語担当の教師が教壇の上に立っていたからだ。

尤も、教師がいなくても同じタイミングで戻っていたのは確かだ。何故なら後ろの席に座るハルヒは、さつそく・・・いやとつくにお昼寝タイムに入ってしまったているからだ。

放課後。

ノートを取りつつも半分以上が上の空で終わってしまった午後の授業も何とか終わり、掃除当番以外の生徒は部活、予備校、バイト、帰宅とそれぞれの途に着く。

谷口はどうやらコンビニのバイトを始めたというので、そのままバイトに向かってしまった。

国木田と軽く会話しつつ荷物をまとめ、廊下で立ち話。

俺がカバンを置いて、日向で暑かったからと脱いでいたブレザーを着る。

するとタイミングを向こうも見計らっていたのか、一人の女子生徒が接近。

ハルヒではない。ハルヒは授業終了のチャイムが鳴り終わるや否や、荷物を抱えてさっさと教室を出てしまったのだ。

「キヨン！ちよっと遅くなるから先行ってて待ってなさいよ！」とだけ言い残してだ。

「ああ」

と返事だけしつつ、こちらも今に至るのだが・・・春夏はあれこれ言われていたこの出来事も、今ではすっかり日常のものになってしまっていた。だから誰も驚かない。

来た女子生徒は他の誰でもない。古泉だ。

「部室行きますか？」

男時代と変わらない笑顔。国木田がぼかんと間抜けな顔をするのをよそに、俺はぼんと国木田の肩を叩いて

「じゃあお先」

と言って、古泉と部室に向かう。

「涼宮さんは？」

「部室かどうかわからんけど、チャイムが鳴り終わる前にはもう教室から消えてたよ」

「そうですか」

「また何かを発見して、うちらに参加させるための手立てを取ってるんじゃないのか？」

「そうかもしれないね。また面白いことだったら良いですけど」

「付き合わされるこっちの身にもなってほしいよ」

「でも閉鎖空間が生まれなければ、結果としては楽しめるわけですし」

「程ほどが良いんだよ。俺は昨日の出来事で今週は十分お腹いっぱいだよ」

「あら？じゃあ満腹なのに私をこっしたの？」

「ここまで大きくなると思ってなかったもんな」

「大きくなるって・・・胸がですか？」

意地悪な眼で意地悪に聞いてくる古泉。

確かに胸はある。朝比奈さんに匹敵するのは確かだ。

だが待て。待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て！

一瞬飲まれそうだった雰囲気を踏ん張って留まり、一気に背の低くなった古泉を見下ろしつつ言ってる。

「俺は状況を知っているんだ。だからその手の会話はなしだ」

「あら・・・」

だめかあ〜と言ったような顔をしやがって。

「まあ今のはちよつとやってみただけですよ」

「他当たってくれよ、そんなのは」

「そんな事出来ませんよ。涼宮さんより注目浴びてしまったら、自分で閉鎖空間を生み出すことになるんですから。もしそうになったら「機関」から始末書どころじゃすみません」

「注目度に関してはハルヒが上でなければいけないのか」

「全部が全部とは言いませんけど・・・でもその方が興味を持つ人間も集まりやすいですし、後々都合は良いと思うんです。コンピュータ研究部の部長さんが失踪した事件の時のように」

「つまり楽しめるきっかけ作りってことか」

「はい。その方が閉鎖空間が生まれるリスク、確率がかなり下がります。実際あの頃が一番発生する確率が少なかったですし。」

「ところで・・・涼宮さんは、私が女性化してしまったということをご存知なのでしょうか？」

「あ・・・どうだろ？今日はあまり話してなかったな・・・」

ハルヒとは同じクラスであり、かつ席も俺の後ろと近いのだが、朝挨拶する以外の会話は、日によっては無い場合もある。どうせSOS団の部室で、例え嫌でも話すし、そもそもハルヒは休み時間になると大体どこかへ行ってしまうたりするのだ。授業中に話すこともあるが、前の席に座る俺はいつまでも後ろを向くわけには行かない。メモを交わしつつの筆談もあるが、途中でハルヒから「捨て」と筆談を終了させるのだ。

これは大体質問したときに返ってくる。人に散々聞いておいて自分は答えないのかよと思うだろうが、これがハルヒなのだ。

一応断っておくと、ハルヒとの会話の多い少ないが、閉鎖空間の発生と関連はしていない。関連していたら大事だ。

俺はそれこそ発生を最小限に抑えるべく、機関とかから会話に関しての特訓なんぞ受けさせられかねない。何が悲しくて俺がそんなハルヒとの会話の仕方なんぞ教わらなければならぬのだ。

常に状況を伺っては見極め、適切な判断で行動を実行・・・など、政治家よろしく抽象的な表現で指導なんぞやらかしたら、赤い丸い玉だろうが何だろうが、もう知ったことなく怒るだろう。

全く・・・ボランテニア精神の強い人に引き受けて欲しいよ。

恋人を失いたくないからといつもチキンに様子を伺っては「今日も僕の彼女でいてくれた」等と彼女でいてくれた日数をカウントしているような、そんなのは断固お断りだ。

ああ・・・あれやこれや考えてたら調子が狂いそうだな。  
廊下の窓から空を見ると、そんな調子狂いそうな青い空が見えた。  
5限に入った後、急に晴れてきて、今では快晴並みの青空だ。雲は  
どこへ行ったのやら・・・

部室には既に長門が入っていた。

いつもと同じ位置にパイプ椅子を広げ、そこで本の世界に入る。  
しばらくハードカバーの分厚い書物だったが、今回は小説だろうか  
？体のサイズに合ったかのような薄目の本である。  
俺でも一日で読みきれそうな感じの本だった。

「まだ長門だけか」

「・・・そう」

「ハルヒはこっち寄らなかつた？」

「・・・涼宮ハルヒは現在演劇部の部室にいる」

演劇部？次は演劇をやるうって話じゃないだろうな？まあこれで古  
泉を男装させて戻るきっかけを・・・などと何かストーリーが出来  
上げれば、それは出来すぎなのだが・・・

「文化祭が終わったので、気に入った衣装をもらうつもりなのかも  
しれませんね」

それで朝比奈さんと古泉に着せるんだろうな。

また部室に物が増えるってわけだ。クリーニング代が馬鹿にならん  
ぞ。

「そういえば今日は2年生は6限でしたな」

「ああ、そういえばそうだったな」

2年生は火曜日と木曜日が6限まで授業がある。だからまだ朝比奈  
はここにはいない。

「じゃあ朝比奈さんよりもハルヒが来る方が早いかな」

「ですね。今日はどうします？」

実は芳しくない状況と昼に話していたにも関わらず、お得意の0円スマイルを浮かべ、長机にはUNOやトランプなど、カードゲーム一式を揃える。

「ずいぶん落ち着いてるよな」

「そうですか？」

「あれだけよろしくない状況のように話していたわりに、結構楽しんでる感じじゃないか。それこそこのままでも良いと思わせぶりな・・・」

「あなたもまたあの姿になればもっと楽しいと思うのですが」

「やめてくれ」

「ふふふ・・・まあ今焦っても涼宮さんが来れば何も出来ませんし、朝比奈さんもいませんから・・・あわててもどうしようもありません。ならば逆転の発想で、今は今を楽しむ・・・と言ったところでしょうか」

「・・・にしても危機感を感じてるようには思えん」

「芳しくないのは今後・・・そう表現するべきでしょうか？」

2年生も授業が終わり、学校は全体が放課後に入った。

外からサッカー部が紅白戦を行っているのか掛け声が響く。野球部も攻守の練習だろうか、時々金属バットの軽快な音が響く。

日が本格的に傾き、西日が差し込む。

程なくして、朝比奈が部室にやってくる。年長であって皆後輩であるにも関わらず、遅くなつたことを詫びながらお茶を淹れる。

いつもなら先にメイド服に着替えるのだが、今週はクリーニングに出してしまっている。

夕方に近づいてくると気温も下がるので、メイド服以外のものは基本的にハルヒが言わない限りは着用しない。

一度だけ、雨で冷えるときにバニースーツの着用をハルヒが命じたことがあったが、朝比奈さんは寒くて嫌だといい、俺がなんとか説得して矛を収めたことがあった。

「冷たい空気の中で肌をさらけ出す女性も良いじゃない」  
アヒルの嘴のように口を尖らせてブツブツ文句を俺に垂れたが、季節の変わり目は体調を崩しやすいのだ。いくらハルヒでも学校内で一二の人気を誇る朝比奈さんを病に伏させてしまうことは許されないだろう。

ハルヒは気合が根性が足りないだの言い放って一向に構わないだろうし、それはそれで、今度は体力向上のためにとマラソンやら何やらトレーニングをやるぞと言いかねない。

男の俺でもめんどくさくて嫌なところ、ハルヒなら絶対またコスプレさせた上で実行に移すのは火を見るより明らかだ。

確かに何着ても似合いそうだし、意地悪してみたい気持ちもわからなくはない。

だがそれは恋人同士であり、かつ同意があつての話だ。嫌なら諦める。風邪引いて気合だ根性だ叩く前に、ちよつとやそつと諦めも考えてもらいたいものである。

いくら閉鎖空間を発生させないためにもとはいえ、さすがにそこまでの犠牲は避けたいものだ。それだったら戦って倒した方がずっと良い。

超能力があるなら「俺が責任を取る。構わん！」とカッコよく言うてのけてもやりたいところだが。

朝比奈さんの淹れたお茶を頂いたところでハルヒが登場。

予想通りというか何と言うか、肩にかけている通学用のカバンの他に、手には紙袋が二つ。

演劇部からの戦利品か？

ハルヒも朝比奈さんのお茶を飲み干すと、開口一番。古泉をコスプレさせると宣言した。

「やはり・・・」

笑ってはいえるものの、やっぱりちよつと抵抗があるようだ。

そりゃ本来男だもんよ。俺だって昨日は地獄だったもんな。まあ古泉よ、せいぜい頑張れ。昨日の俺がそうだったのだから。

最後半分弱残ったお茶を飲み干して、俺は外に出た。着替えるのだろう？ だったら出なきゃ。

本来男だったから別に良いだろうなんて考えは持たない。ただ時間は掛かるだろうから、入り口脇に立ってかけている余りのパイプ椅子と、本棚から適当に本を取り出して

「長門、これ読んで良いか？」

本棚の本は文芸部である長門に断らなければならぬだろう。ハルヒは長門が承諾する前に「構わないわよ」と言い出しそうだが。

「・・・なら、これを読んで」

窓側の本棚から一冊の本を取り出し、俺に差し出す。

長門お勧めの本だろうか？ それとも・・・？

俺は自分で取り出した本をしまつて、長門から本を受け取る。

「わかった、じゃあ借りるよ」

「・・・構わない。でも読んで」

最後に読んで促す長門に、これは何が何でも本に手を出せということだと確信した。即座に理解できた。

長門のようにうんとうなずき、俺はパイプ椅子を左腕で抱えてはドアを開け、部室から一時退散。

SOS団の部室は一番隅にある。だから廊下の片方は行き止まりになっている。

その行き止まりには、清掃用のロッカー、使われなくなった机や椅子の積み重なったものに、どこの部が置いたのかわからない木箱や段ボール箱が少し積み重なっている。

俺は一つ箱を足置きにして、長門から借りた本を広げる。



栞。栞だ。

表紙からくまなく目的の物を探す。

これまでに、長門は栞を通じて俺に救いのきっかけを作ってくれた。

長門がどうい存在かを教えてくれた日。

俺以外のSOS団の人間が普通の人間になっちゃった日。

短冊というときもあったが、長門とのやりとりは栞が基本だ。栞に始まり、栞に終わる。

特にみんなが普通の人間になっちゃったとき、栞に助かるきっかけがみつかったときの喜びは今でも忘れない。あの時は本当に打つ手なしと思っちゃったからな。

あの世界の長門・・・今も淋しそうに本を読んでいるのかもな。

せめて条件を揃えたときに残された面々で仲良くやってくれてれば良いが・・・

今更どうしようもなければ、どうでも良いとも思える世界のことを考えつつ、俺はちょうど中間のページに挟まっていた栞を発見し、抜き取る。

「あれ？」

栞は、表にはローカル線だろうか、赤茶色に染みたバラストにこげ茶色の枕木。そして一日何本走っているのだろうかを想像させる歪んだレール。

線路脇は勿論、線路の間にも草が生えている。そんな写真だった。裏は真っ白。書店で購入したものなら、書店の住所や電話番号とか何かしらなことが書いてあるはずだが、裏には何も書かれていない。もう一枚あるのかと思い、他のページを見渡すのだが、栞はこの一枚だけだった。

長門の奴、間違えたのか？

そうかもしれないと思って立ち上がるうとしたが、恐らく今は着替え中だろう。もしかしたら古泉は着替え終わっても、朝比奈さんに何か着せたりしているのかもしれない。

コスプレイヤーが一人増えて、ハルヒは楽しみが倍になったことだろう……

「……帰ろうかな」

こう呟きながら廊下の天上を見つめる。

どのくらい時間が経ったのだろうか？部屋を出たときの時間を確認していなかったので、どのくらい待ったのか気になってしまった。

少なくとも5分や10分ではない。何故なら、長門から借りた本を半分近くまで読んでしまったのである。勿論難しい部分は斜め読みだが。

古泉用の衣装を早速用意してきたハルヒだが、そんなに楽しいのか、それとも古泉が拒絶して揉めてしまっているのか、それほど着替えるのに手間のかかるものを持ってきたのか？

着替えてからのお楽しみと思ったが、男一人俺だけが部室を追い出されたのはちょっとばかり寂しいものがある。女ならみんなで盛り上がったのかかもしれないが。

ずっと楽な格好でいたので、俺は足を床につかせて、一回伸びをしようとして立ち上がる。

「イテテテ！」

冷える廊下で良い姿勢で本をずっと読んでいたものだから、背中や腰の筋肉が硬直してしまっている。

「運動不足かな、こりゃ」

オヤジじゃあるまい。とか思いつつ、腕を回し、腰をひねり、アキレス腱を伸ばして柔軟体操を行う。

それにしてもどのくらい時間が経っただろうか？そろそろ勘弁してほしい。

いつもなら「いいわよー」とハルヒの声が聞こえるのだが、今回は

まだ何も言われていない。

外は日が完全に沈み、あとは僅かに残る夕焼けだけとなった。そろそろ帰ろう。さすがにこれ以上は待てない。寒いし疲れた。

本の続きは家で読もう。ちょっと遅めの読書の秋だ。秋の夜長、コ―ヒー飲みながら読書の夜も悪くは無い。

ドアをノックして応答を待つ。

しかし反応がない。

もう一度ノックする。

やはり反応がない。

「おい、ハルヒ！」

騒いでいて聞こえないのか？まさか眠ってしまったなんてオチはないだろう？

「俺はそろそろ帰るぞ！おい！聞こえないのか！」

ドンドンと強く叩く。一体中では何をやっているんだ？

何度ノックしても、何度呼びかけても反応が無いのに業を煮やし、俺はもうドアを開けることにした。

後で何言われようと構わん。応答しないのが悪い。これだけ強くノックしてて応答なしにも関わらず無反応なのだから。

せめて長門には本を持ち帰ることくらい断っておかねばならないし、どうも変なところで律儀な俺がいるような気がしたが、この際それはどうでも良い。ドアノブを掴み、ゆっくりと開ける。

・ 2 ・ (後書き)

とりあえず勢いで書いたプロローグから2話までを載せました。

誤字脱字はチェックしたつもりですが、今後もしチェックしてちょこちょこ直したいと思います。

続きはこれからですが・・・まあさらっと読めるようなものになればよいと思っているのですが・・・どうなることやらorz  
とりあえず投げ出さないようにだけはしたいところです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4602i/>

---

涼宮ハルヒの何か

2010年10月13日16時37分発行